

今年度の研究を振り返って

他園の方と「つながり」を通して、保育に対する様々な見方や考え方にふれることができ、大きな学びになった。安心感についての語り合いでは、保育者が近くにいるという「人の安心感」が何よりも大切なことだと気付くと同時に、すぐに結果を求めてしまいがちな自分自身にも気付いた。J児はこの1年間で大きく成長して、好きな遊びを見つけて遊ぶ姿が本当に楽しそうである。今後も「安心感」を大切にしたい保育をしたいという、自身の保育の根本的な部分を見直す機会を得られたことに感謝している。

今後は、本園の職員同士でもこれまで以上に語り合う機会を設け、より質の高い保育の追究を続けていきたい。これまで以上に園の魅力にも気付くことにつながるだろうし、これまで以上に悩みも出てくるだろう。つながる保育によって他園と共有し、語り合うことで、地域全体のさらなる保育の質の向上に結びつくことを願っている。

【3歳クラス担任】

本研究は、自園と他園という二項の関係に加え、他園と他園の接点としての自園という、より複雑な地域ネットワークの中に本園を位置づけようとした試みであるともいえる。その点において、今後の国立大附属園の存在意義を議論する際にも、本研究の成果が重要な示唆をもたらす可能性がある。また、本園の強みであり、同時に弱みとして構造上の制限にもなっている要素が、初等教育経験者のみで正規職員を担っている点である。本研究の利点の一つは、本園教員が自園の文化を他園に共有する役割を果たしつつ、他園の実情に触れる中で、幼児教育実践者としての本園教員の練度が高まる可能性にあると考えている。他園との関係性をアーカイブし、その蓄積を土台に、初等教育と幼児教育のブレンドが実現するのであれば、個人的には芸術だと思える。微力ながら、そのプロジェクトに参画できたことに心から感謝している。

【3歳クラス副担任】

幼稚園での勤務が初めての私は、日々迷いながら保育をしていた。その迷いを少しずつ解決してくれたことの一つは、カンファレンスである。はじめに私たち附属園がカンファレンスで大切にしている五つのことを共有し、参加していただいた皆さんから、日々の悩みを話していただいた。話を聞く中で自分の日々の迷いと重ね合わせることが多くあった。答えのない保育だからこそ、語り合ったりすることで、子どもたちの見方や援助の仕方、環境構成など、ヒントをもらうことができた。それぞれ異なる園の文化をもった職員や経験年数の異なった職員が子どもの姿について語り合うことは、保育のレパートリーを増やすためのとても貴重な時間であり、ありがたい時間だったと感じている。当たり前を問い直し自分の保育を毎週省察することは、簡単なものではなかった。しかし、当たり前を考えることによって、自分がずっと大切にしていきたいこと、保育で大切にしていきたいところが見えてきたようにも思う。これからも子どもと向き合い、自分のフレームをつくりかえ続けることができる保育者であり続けたい。

【4歳クラス担任】

今年もいくつかの園を訪問し、その中で私は、以前一緒に保育をした同僚と再会した。一緒に働いていた時と同じ口調で屈託のない様子で「どう保育したらよいかわからなく戸惑っている」と話してくれた。保育の日々はライブであり、どんなにこちらが気の利いた言葉を用意していても、それが必ずしも役に立つとは限らない。子どもとの時間の中で出会う様々な出来事にどう対応するかは、常に私たちの中に備えておかなければならない。カンファレンスでいろいろな先生たちと話をすることは、私にとってこの備えを蓄えることにつながった。話を聞きながら、自分ならどう考えるのか、本当に大切にしたいことは何かと、繰り返し、繰り返し頭の中で巡らせることで、より自分の保育をみつめることができた。「わからない」と話してくれた元同僚も、自身が今保育をしている園の先生方と、子どもを真ん中にした話の中で「わかる」が増えていくといいなと思う。

【4歳クラス副担任】

「つながる保育」の研究を始めて、3年経った。この研究は大学との連携があり、地域の中で保育の情報が集まる附属園だからこそできる研究であったと振り返る。だからといって、地域の園に距離を置かれる園であってはならないと考える。この3年間、他園の方から「附属への壁がなくなった」「つながってよかった」「保育がよりよくなった」というご意見を多数いただき、本園が地域の中の保育のハブとして機能していたのではないかという実感があるからである。学習院大学の秋田喜代美氏からも助言をいただいた通り、ハブになるとは、上下関係ではなく実践知をフラットに共有することである。今後も「つながる保育」のしくみの中で、一緒に保育を語るということが、園内研究の域を超え、相互の保育の質を高め、ひいては地域の保育の質の向上につながっていく。そのように考えると、この研究には大きな価値があったのだと捉えている。

「つながる保育」のしくみの中で私たち附属園の職員の大切な使命の一つは、子どもをみる確かな目を磨き続けるということである。他園の先生方から魅力ある附属園であり続けるためにも、研鑽を重ねていきたいと思いを新たにしている。

【5歳クラス担任】

保育に「正解」はないからこそ、常に目の前にいる子どもにどのような援助支援がよいか、日々悩んでいる。その中で、他園との交流を通して学ぶことは、今ある保育にとらわれすぎず、新しい風を取り入れて、自園の保育に良い学びとなると共に、自園の保育の振り返りにもつながっていく。また他園との交流や小中学校との交流を通して、地域全体で子どもたちの成長を見守ることにもつながっていき、生涯教育にもつながっていくと考える。このつながる保育の研究を通して、自園だけでは学べなかったであろう多くの学びとつながりを得ることができたと感じている。

【5歳クラス副担任】

3年間の研究で印象に残っていること、うれしかったことは、他園の級外の先生と複数回カンファレンスができることである。級外には級外の迷いや悩みがある。カンファレンスを通して明確な答えが見つかったというわけではなくとも、同じ立場の方と意見を共有することは、級外の立場からよりよい保育を目指す楽しみにつながったと思っている。今後もたくさんの級外の先生方とお話する機会があればと願っている。

【教育補佐員】

私たち職員みんなにとっての「当たり前」は、揃っているのか。本園の「当たり前」にも、“不易と流行”のような、いつまでも変わらないこと、そして時代時代に応じて変化することがあるのだろうか。本園の当たり前が、その時その時のメンバーの誰かの観によって影響を受けることが“よりよくつくりかえていく”ということになるのだろうか。つながりの3年を終えて、回りまわって自分たちの足元を固めることの大切さが見えてきたことが成果でもあり課題でもあると感じている。来年度以降は、木に集まる鳥のように参照軸（実のなる樹の絵）に立ち戻り、私たち職員の「当たり前」を確かめる時間を大事にしていくといいと思う。

交流をもってください園の皆様、ありがとうございました。

【養護教諭】